

【最優秀賞】

団体名	大津市立葛川小・中学校 KCLプロジェクト 安曇川流域資源を生かした起業家精神育成の推進 (おおつしりつかつらがわしよ・ちゆうがっこう けーしーえるぷるじえくと あどがわりゆういきしげんをいかしたきぎようかせいしんいくせいのでいしん)
活動の内容 (概要)	安曇川上流に位置する大津市立葛川小・中学校は、豊かな水と流域資源から独自の文化を持つ山間の小さな学校だ。弊校のキャリア教育の柱は、安曇川流域資源を活用した起業家精神育成である。子どもたちは、児童生徒数減少による廃校の危機から母校を守るため、地域を知ってもらい<Know>、来てもらい<Come>、住んでもらう<Live>活動、KCLプロジェクトを推進している。

受賞理由

- 子供たちの能動的、実践的な取組みが高く評価できる。山間僻地という立地を弱みとせず、オンラインをフル活用している点が素晴らしい。子供たちなりにしっかりと地域課題を把握し、明確な解決策を持って活動を展開しており、カプセルトイが完売するという結果をもたらしている。子供発電プロジェクトなどは、S T E A M教育の要素もあり、探究学習の題材としても興味深い。起業家精神が育まれた子供たちの今後の活躍が楽しみである。
- 廃校の危機に対する子供たちの意識から、過疎化する地域のための懇話会が立ち上がったところから、地域に広がる礎となっており、小中連携での9年間連続した効果的なキャリア教育になっている。アントレプレナー要請という点も、実践的で子供たちの将来のためになる取り組みで、プロジェクト推進団体やクラウドファンディングなど積極的である。
- 廃校の危機にあった葛川小・中学校が小規模特認校の認定を受け、安曇川流域資源を活用したアントレプレナーシップ教育を軸としながら、地域を知ってもらい<Know>、来てもらい<Come>、住んでもらう<Live>ことを目指した「KCLプロジェクト」を推進している。教育委員会、企業、地域団体との連携による取組が2013年からスタートし、KCLプロジェクト本格開始の2017年から今日まで継続している点も評価される。
- 過疎・廃校という課題に直面した学校が、安曇川流域資源をテーマに子ども主体の9年間のキャリア教育を展開、地域に深くかかわった子どもは地域を愛するようになる好事例となり、地域活性化にも寄与している。また子どもの課題意識からスタートした企画を実現するために、教師はITを駆使し、企業・組織と連携するプロデューサーとなり、社会総がかりで組織的に多彩な活動をすすめている素晴らしい取り組みである。
- 過疎に苦しむ地域から逃げ出すのではなく、地域、母校を守るためのKCLプロジェクトは、全国の過疎に苦しむ地域のお手本になるようなPJだと思った。継続性も十分である。常に子供たちが主体で進めていけるような周りの連携姿勢が功を奏している。KCLプロジェクトに参加したことが誇りであり、幸せに感じる事ができる素晴らしいキャリア教育企画であると感じた。へき地校はオンラインの活用でデメリットではなくなったことが、WEBサイトでも確認できた。ここでのデジタル化は、むしろ人との繋がりを作っているのではないかと感じた。
- 課題と狙いが明確であり打ち手が子ども中心というところもとても良い、他の地域でも活用できるロールモデルである。

連携・協働している機関や団体，組織

【教育関係者（学校，教育委員会等の機関や団体）】

大津市立葛川小学校、大津市立葛川中学校、大津市教育委員会

【行政や地域・社会，産業界等】

一般社団法人あどがわ流域森と家作りの会、松井建設、海洋堂、リバーヴィレッジ、東邦ガス、KUSUNOKI WORKS + design、田丸印房、tezomeya、高映企画、京都光華女子大学、大津市立葛川小・中学校 PTA、葛川学区自治連合会、久多自治振興会

活動開始の経緯



<染色家の指導による天然染め素材の開発>

【活動開始時期】平成25年～ 【継続年数】10年

2013年、過疎に苦しむ地域の実状を目の当たりにした子供の呼び声から「地域のためにできること」と題した懇話会が始まった。地域住民、保護者を交えた懇話会は、人口減少に伴い活力を失いつつある中山間地域の緒課題と向き合うものだった。年に一度行われる懇話会で出た意見をもとに、子供達は取組を計画し形にした。交流人口増加を願ってパンフレットやカルタ、ゆるキャラを制作したり、ハザードマップを手掛けたりと、地域おこしが学校行事として定着を見せる。

時を同じくして、葛川小・中学校は廃校の危機を迎える。校区内からの新入学予定者が向こう3年間いなくなったのだ。しかし、教育資源豊かな学校の存続を願う声は少なくなく、やがて市内全域から児童生徒を受け入れ可能とする小規模特認校の認可を得るに至った。地域外からの児童生徒が全校児童生徒の半数を占めるようになると、一様でないふるさとを前提としたカリキュラム開発に着手した。2018年、地域おこしをキャリア教育に位置付け、小中学校9年間の連続した総合的な学習の時間がスタートした。自らの郷土を守るための活動として掲げられた教育推進の柱が「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成」である。そしてKCLプロジェクトが立上がった。

時を同じくして、葛川小・中学校は廃校の危機を迎える。校区内から

「協力性」についての具体的な取組，工夫している点など



<伝統の筏流しの再現で流域資源を街に運ぶ>

懇話会がプロジェクト化され5年目を迎えた。18年、プロジェクトの推進力を得るため、地域役員や保護者、学校の参加するKCLプロジェクトの推進団体「つなげる会」を設立した。19年、CM制作会社やデザイナーと協同し、プロジェクトのウェブサイトやポスターを制作し掲示。全国コンペの場で広報活動を行った。20年、天然染工房や京都の大学生と天然染小物を開発し、ウェブストアを開設した。21年、地元で伝わる筏流しを再現し、琵琶湖筏旅を実現。山間から筏で運んだ木々を、テーブルベンチに加工し道の駅に寄贈。地元工務店と、水文化と流域資源を街に運んだ。22年、ご当地スタンプ開発でクラウドファンディングを実施。ハンコ制作会社やイ

ラストレーターと地域の魅力を込めたカプセルトイを制作。道の駅に設置したカプセルトイを一ヶ月足らずで完売させた。現在、夢の全国発売に向け、ご当地フィギュアを企業と協同開発している。

プロジェクトが学校の枠を超えるために、他団体の力が不可欠となっている。幸いにも葛川は、滋賀県より「やまの健康モデル地域」に指定され、中山間地域の活力を高める活動に参加していることや、学校が小規模特認校の認可を受け大津市全域から児童生徒を募集している事もあって、学校を開く土壌があった。ふるさとを大切に想う子供達の夢に共感して下さる企業や団体と連携し、学校だけでは果たせない人材育成の枠組みを実践している。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

子供たちのふるさとを想う心はひとりでは育つわけではない。「体験」が、「ふれあい」が、「心を響かせ合う場」が必要である。地域のことをまだ知らない新入生は、清流でイモリを見つけ、大杉にお腹を押し当て手を繋ぐ。地域探検を看板に、五感で触れるふるさとを原体験として体に刻む。中学年では集落を歩き、地図を作り、社寺を掃除し、住民に地域の伝承を聞く。かつての原体験と集落の息づかいは結びつき、やがて親しみへと変化する。高学年になると地域の緒課題と向き合う。過疎に苦しむ地域を、流域資源で解決できないか考え、形にする。「知り、調べ、考える。」そんな6年間を経た子供たちは、ふるさとを想う中学生となる。

「地域のためにできること」と題した懇話会は、今年で10年目を迎えた。今では年三回、地域の方へ向けた実践発表の場を設けている。その場を口団体が、地域役員や保護者、学校長の参加するKCLプロジェクトの推進団体「つなげる会」である。子供の主体性は、地域住民の願いという呼びかけによって発揮される。子供達の主体性ととも、地域住民の願いが、持続的な活動の根幹を成している。

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

地域との懇話会「つなげる会」で出た意見を受けて、子供達は評価改善を行い、プロジェクトを前進させる。同時に、活動計画を提出し、活動予算も要求する。活動資金はウェブサイト更新などに使われることで、次なる活動の後押しとなる。懇話会を通して、地域の声子供達の活動に届く枠組みが機能することで、学校と地域の関係がより密接なものとなっていく。

また、地域内に閉じたり、関わっている人だけが満たされたりする活動とならないよう注力している。だからこそ、大学や専門家、事業所にコンタクトをとって、活動への参加を呼びかけている。子供たちの役割は、プロジェクトを企画することである。企業で言うところのマーチャンダイザーやディレクターといったところだ。教師の役割はプロデューサーである。ただ、弊校は山間のへき地校であり、ふらっと簡単に立ち寄ることのできない学校だ。それもあって、オンラインの活用が活動の生命線となっている。依頼や打ち合わせだけでなく、広報や販売の場もオンライン上に持つことで、へき地校だからといってできないことはなかった。流域資源をもとに社会へ価値を届けられるよう、子供は頭をひねり、大人に力を借り、プロジェクトを推進した。学校は、子供たちの背中を押し、これからの時代を創る人を育成できるよう、時勢を感じ、社会に開かれた学校であることに留意した。

「発展性」についての具体的な取組, 工夫している点など

KCLプロジェクトの活動成果は積極的に公開している。例えば、公募の出品やプレスリリースは子供達の活動を世の光に当てる場となっている。これまで活動成果を応募したコンペティションでは、3つの文部科学大臣賞を受賞する成果に繋がった。表彰を受けると授賞式だけでなく、知事や市長、教育長に表敬訪問し、活動報告を行う機会を得る事も出来た。マスメディアやウェブサイトを通して発信される受賞や活動成果の情報から、学校見学に足を運ぶ移住希望者や応援して下さるサポーター、寄付を申し出て下さる方まで現れた。

特に昨年度実施した琵琶湖筏旅は、地域関係者だけでなく、新聞社やラジオ局、テレビ局の方にも注目いただいた。筏旅のゴールである道の駅には、筏流しのポスターが壁一面に貼られ「おかえり」と書かれた手作りの横断幕が飾られた。

保護者や地域の方、先輩や後輩、有志のサポーターや関連企業の方々が手を振り、3日間筏を漕いだ子供達を迎えた。それはこれまで子供達を支え、力を貸してくださった仲間達だった。小さな学校の、小さな懇話会から始まった取組が、多くの仲間や関係者を増やす活動へと広がった。流域資源を活用し、その地に根ざした子供を育成することが、巡り巡って中山間地域の活力を高め、水循環系を支えるコミュニティを育てることに繋がるのだと、その波及効果の大きさに驚いている。

学校現場の評価・感想・コメント

水源に近い山間の学校の統廃合は続き、2020年に弊校が県内最後のへき地小・中学校となった。一方、小規模特認校制度の認可を得る学校は増加している。地域外から通う子供を預かる学校にとって、子供たちのふるさとを想う心を育むことは容易ではない。その難題に対する処方箋のひとつが、地域資源を活用したキャリア教育ではないだろうか。弊校は廃校の危機という切実な課題が眼前にあり、安曇川流域資源に目を向けるに至った。そんな偶然始まった取組によって、水資源のイノベーションに取り組むことが、その地に根ざした暮らしを考えると、極めて親和性の高い教材になるのだと気付かされた。安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進は、弊校が存続している今だからできる挑戦であり、ひとつのロールモデルに成り得ると考えている。地域を想い、今を見つめ、課題を見出し挑戦する。小学校から中学校までの連続した学びのなかで、ふるさとを想い、社会との接続というひとつの着地を迎え、子供たちは葛川小・中学校を巣立っていく。きっと子供たちは卒業後もなお、新たな課題を見出し挑戦し、新たな時代の創り手となっていくことだろう。終わりのない希望に満ちた創造社会の扉を開くことが、大津市立葛川小・中学校 KCL プロジェクト「安曇川流域資源を活用した起業家精神育成の推進」に込められた願いである。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

KCL プロジェクトの良さは、その活動の中心が子供達であり、自ら自分達の地域を守ろうとすることに価値を感じます。デジタル化が進む中、人との繋がりが減ってきている環境で故郷、伝統、住民達の事を自ら考え行動することは、大人達でも難しい事です。そんな子供たちの活動やエネルギーに我々大人が引っ張られ、何か出来ることはないのか？考える機会を与えてくれる良いプロジェクトです。

株式会社海洋堂 執行役員 小澤正

葛川中学の子供達と「子ども水力発電所」を作ることを目指して2年目になる。彼らと一緒に地域の水資源に着目し、使える水を把握するための流量観測や測量を実施し、その結果から「現実的にできることや構造」を把握し、「何が地域のためになるだろうか？」ということを検討する段階に来ている。段階的なプロセスを経るごとに、彼らの中で、「地域資源」×「事業」に対する理解が深まるだけでなく、「あ〜、そういうことか！」という新たな発見や成長が見受けられる。今後は、関係者との実務的な協議や調整を予定しており、子ども達の手で計算し、考えた結果から「地域のための希望の電気」が生まれることを楽しみにしている。

株式会社リバーヴィレッジ 代表 村川友美

教室を飛び出して、傍にある安曇川流域の材、自身で材を感じ、触り、実際に物を作る体験とプロジェクトを通して地域と多様な世代間との交流から、人を知り自分を知る貴重な時間を作られていると思います。ふだん、地域が産する木材で、事業を行う当社は、出来る事で、プロジェクトの応援を続けたく思っています。地域から素敵な人材が育まれていることを願っています。

松井建設株式会社 代表取締役社長 松井公明